

会員報告

第 18 回日本褥瘡学会学術集会 初参加報告

宮野 秀樹

去る9月2日(金)・3日(土)にパシフィコ横浜で開催された「第18回日本褥瘡学会学術集会」に参加してきましたので報告します。褥瘡学会学術集会への参加が初めてに加え、報告者として参加したのでいつもと勝手が違う場に少々戸惑ったというのが正直なところ。私は、在宅医療委員会企画の「顔の見える連携から心がつながる連携」というテーマでのシンポジウムで、生き生きサポートセンターうえるば高知の理学療法士・下元佳子さんとペアで臨みました。本来は報告者と担当患者というペアが組まれるのですが、今回は私が褥瘡治療における連携について課題と感じていることと下元さんが在宅医療に従事する中で課題と感じていることで、共通の課題を提起しながら症例を紹介していく形をとることになりました。下元さんの「症例1. 褥瘡予防のための医療のあり方・情報のあり方は？」の後に、「頸髄損傷者の褥瘡経験から考える医療との付き合い方、当事者に必要な力。」を報告しました

昨年11月半ばから本年3月初旬まで3ヶ月半をかけて5年間保有していた褥瘡を完治させた私が、褥瘡体験から得た医療や関係者に課題として提起したのは、専門家が継続的に

関わってアドバイスや生活チェックを行いながら、「褥瘡の怖さ」を正確に伝え、医療を身近に感じさせることが、当事者の褥瘡予防に対する意識改善につながる。そして、「適切な治療はどこで受けられるのか」「適切な予防アドバイスはどこで受けられるのか」「身体状態はどうチェックすればよいのか」「生活環境が適切であるか誰に相談すればよいのか」「適切な福祉機器・用具はどこで入手できるのか」といった『地域生活を長く維持するための選択肢』を増やすことを要望しました。

障害当事者が褥瘡学会の場で発言することはほぼ初めてということらしく、参加されたみなさんが本当に熱心に聞いてくださり、また質問も多かったのが印象的でした。名刺交換も今までにないくらい多かったです(笑)。それにしても1000座席もあるメインホールは広かった(たくさん来てくれて安心しました)。

当会でもスローガンにしている「You are not alone」。これは医療の連携にも言えること。私たちはただの連携などいりません。決して一人にさせない・孤独にさせない、そんな連携を望むことをこれからも強く訴えかけていきます。



下元さんと私



生き生きサポートセンターうえるば高知のみなさん